
ゼロの使い魔二次創作（予告？）使い魔は魔物で平民で狩人で。

めたるみーと。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 二次創作（予告？）使い魔は魔物で平民で狩人で。

【NNコード】

N9838X

【作者名】

めたるみーと。

【あらすじ】

少年、平賀才人は退屈していた。

鏡に導かれ、次元の狭間に招かれた才人を待ち受けていたのは祖龍

ミラルーツと始祖プリミル？

才人がアルビノ化して、

魔物になれる力を貰い、ルイズに召還される話。

ほぼオリ主みたいな才人。

原作見たことない作者の完全な自己満にお付き合い下さい。
連載となっていますが、今やっている他の小説が一区切りしたら

いよいよ書き始めの予定ですので、お待ち下さい。

使い魔は魔物で平民で狩人で。（前書き）

頑張った。

なのはの方が一区切りしたらいつも連載しようと思います。

使い魔は魔物で平民で狩人で。

少年は退屈していた。

彼は平賀才人。

東京都に住む男子高校生である。

勉強もある程度にはこなすし、運動もできるが、若干ひきこもり気味だった。

両親は他界し、一人暮らし。

学費などは叔母が払ってくれているようだが、そんなことに興味はなかった。

学校でも友人と言えるような者はいなかった。

ネットでは友人はいたが、顔を合わせたこともない。

「なんか面白いことないんかねえ……？」

少年はいつも一人だった。

故にそれを当たり前だと思っていた。

ふと、一緒に遊べる友人を作ればこの退屈も無くなるのかと思つたが、思つただけだった。

少年、才人は秋葉原に来ていた。

先日、三台のノートパソコンのうち、一台が何かしらの原因で故障したので、秋葉原で修理してもらったのを受け取りにきたのだ。代金を払い、修理屋を後にする才人。んつ……。と軽く背伸びをする。

「今日も退屈なことこの上ないな……。
ま、平和なのはいいことだけじよ。」

しばらく歩いたところで、妙なことに気が付いた。

「人がいない……。」

才人はここに何度も足を運んだことがある。
この通りはレイヤーやらオタクやらメガネをかけたスース姿のサラ
リーマンなどでいつも賑わっていた。
ところが、今は人も車もない。

「どうなつてんだ……？」

通りをしばらく進むと、奇妙な鏡を見つけた。

「なんだこりゃあ……。」

見たこともない大きな鏡。
それが少しとはいえ宙に浮かんでいるのだ。
鏡面に文字が浮かび上がった。

“退屈か少年よ。”

才人は驚いた。
が、少しにやりとしたあと、

「ああ、退屈だね。」

鏡に向かつてそう言い放つ。

“ 退屈しない世界に行きたくないか？”

鏡面は更に文字を映す。

読めないはずの異国の文字。
だが、才人には何故か理解できた。

「連れて行つてくれるのか？」

質問に質問で返す。

鏡面はキラリと妖しく光ると、
再び文字を映し出した。

“ お前が望むならば、だがな。 ”

才人は震えた。

そうか、ノートパソコンが壊れたのも、
人がいなくなつたのも、このためだつたのだ。
才人はにやりと笑うと、

「連れていけ。

退屈しない世界に。

そこには何が待つてゐるんだ？

何があるんだ？

剣と魔法か？

魔獸つらつら世界か？」

死んでいた眼が輝きだす。

鏡は文字を映し出す。

“ 私に触れるがいい”

ククク……と笑う才人。

「連れていけ。」

それだけ言うと、鏡に触れた。
鏡が才人を飲み込んでいく。

鏡は消え去り、人々は再び現れた。

確かにこの世界に存在していた高校生は、この世界から姿を消した。

「どうだここ……？」

才人が目を覚ますと、そこは真っ暗な世界だった。

「まさかここが退屈しない世界じゃねーだろうな……。」

「ここは世界の狭間だよ、平賀才人。」

「んあ？」

後ろを振り向く。

闇の中に鎧を着た男と、白い龍が佇んでいた。

「自己紹介させて貰おう。

わたしはブリミル。

君が今から行く世界の神みたいなものさ。」

鎧を着た男が言つ。

「神……？」

『そうだ、神だ。』

龍が口を開き、話し出す。

『私は祖龍ミラルーツ。

全ての龍の頂点にして祖なるもの。』

『……ははは、龍の王様ってか。』

才人は動搖を隠しきれなかつた。

しかし、ブリミルと名乗つた男は笑顔でこう言つた。

「氣を楽してくれ。

何も僕達は君をとつて食おうつてんじやない。

ただ、君に渡したいものがあるだけだ。

ミラルーツ、あれを。』

『うむ。』

白い龍、ミラルーツと名乗つた龍が淡く光る。

現れたのは一人の人間。

髪は白く、身体つきは才人と同じ位の少年だった。

「こいつがどうしたつてんだ？」

「これから君の行く世界は、少し物騒でね、彼はミラルーツが創り出した身体。

つまりはただの素材さ。』

『左様。

我的創り出した人の雄の身体ぞ。

お主には、Iの身体と融合してもらひ。」

「……融合？」

つてことは何か？

俺もただの素材だつてか？」

二人（もしくは一人と一匹）のいい方に少し腹を立てたのか、才人の口調に怒気が入る。

「いや、違うよ。

どちらかと云うと、君は主体だ。

君を強化するために融合をするのです。

言つたろ？

「これから君の行く世界は少し物騒だつて。」

「なるほど、多少強くなきや生き残れないってか。」

『その通りだ。

しかし、我等の言い方にも非があった。

すまぬ。』

「構わないさ。

それより、融合するんだろ？

構わねーから早くやつてくれ。』

そう才人が言つと、ミラルーツが大口を開けて、素材の少年を喰つた。

「……へ？」

そして、才人もまた、ミラルーツに飲み込まれた。

「死ぬかと思った……。」

そう言うのは融合を終えた才人。

髪は白く染まっていたが、他には何も変わっていなかつた。

「まさか卵になつて出て来ることになるなんて思つてなかつたぜ……。」

『先に教えた場合、逃げるかも知れぬからな。
手荒い真似をしてすまない。』

「構わない。」

『でも、ミラルーツ、お前雌だつたんだな。
私は龍の祖、ミラルーツ。』

『祖ということは龍を産んだつことだ。
なんの不思議もあるまい。』

「そりやそうだ。』

少し笑つた後、ブリミルが才人に話しかける。

『では、君の能力についての説明をするよ。
まず、第一に、この箱を見てほしい。』

才人が覗き込んだ箱の中には膨大な量の剣、弓、ボウガン、薬や鎧
甲、様々な鉱石に草、肉やらなんやらとにかく膨大な量が中に入つ
ていた。

『これはミラルーツからのプレゼントだ。
武器の名前や使い方、道具の使い方は身体がわかるだろう。
そして、これが僕からの贈り物。
待つて、今記憶を送る。』

ブリミルはそう言つと、才人の額に手を当てた。

「ぐつ……！」

才人の頭に激痛が走るが、すぐに引いた。
そして才人の頭に流れ込んでくる記憶。

「……なるほどな、その鎧甲を着けることで、自分の意思で魔物になれるってことか。

そして、この箱は俺に流れ込んできた能力、“次元の裂け目”でいつでも取り出し可能。

鎧甲は呼べばくる。

……これでいいのか？」

「ああ、大丈夫。

だが君は凄いな。

普通は理解するのに三分はかかるのに。」

「んな時間あつたらカップヌードルを食べる。」

そう言うと一人笑う才人。

カップヌードルを知らない一人はキヨトンとしていたが。

「さて、そろそろ送るよ。

準備はいいかい？」

魔法陣らしきものの中心に立つ才人。

その横をミラルーツとブリミルが挟んで向かい合う。

「ああ、大丈夫だ。

存分にやつてくれ。」

『承知した。』

少しの間だつたが、楽しめた。

礼を言おう、才人。』

「多分僕達は会うことはないだろ？けど、

君の幸せを願つてるよ。』

「ああ、色々ありがとな。』

「それは君を召還した、彼女に言つことだね。』

彼女？なんだそれは？

それを聞く前に、才人は転送された。

一方、ここはトリステインの魔法学校。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは疲弊していた。

今日は魔法学校の進級試験。

サモン・サーヴァントで、自らの使い魔となる者を呼び寄せる儀式を行い、

コントラクト・サーヴァントで契約をし、晴れて進級出来るのだが

……。

「ハア……ハア……。』

「ミス・ヴァリエール。』

明日に延期しましょ。』

あなたは疲れきつてい。』

ルイズは魔法の才がなかつた。どの魔法を使っても爆発する。

故に他の生徒はみな彼女を“ゼロのルイズ”と呼ぶ。
魔法成功率“ゼロ”のルイズ。

ルイズはこの二つ名を挽回しようと、何度もサモン・サーヴァントを行つた。

が、結局は爆発。

「ミスター・コルベール！

もう一度だけ、もう一度だけお願ひします！」

「いや、しかしだね、君も随分ボロボロになつていて

またの機会にしょつ。」

コルベールと言われた男性は、ルイズに優しく諭すように声をかける。
だが、ルイズも諦めない。

「あと一度でいいんです！」

「お願ひします！」

「わ、わかつた。

「あと一度だけですよ？」

「ありがとうございます！」

ルイズは杖を構え直した。

「肩の力を抜いて、リラックスです。

ミス・ヴァリエール。」

コルベールの声が聞こえる。

とりあえず言う通りに力を抜き、リラックスする。
うん、今度こそ、出来る。

そう確信したルイズは、呪文を唱え始める。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

五つの力を司るペンタゴンよ……！

我が運命に従いし、使い魔を召還せよーー！」

爆発。

また、駄目だつた。

私はやつぱり、ゼロでしかないのかな？

そう思つた矢先だつた。

「おい！煙の中に何かいるぞ！」

「え？」

ルイズは顔を上げ、立ち上がると煙を見据えた。
確かに、煙の中に影がある。

あれが……私の使い魔……！

煙が、晴れる。

しかし、そこから現れた者に、ルイズはこう問い合わせた。

「あんた、誰？」

その者は、人だつた。

「あんたが俺を召還した奴か」

髪は白く、身長はルイズより少し高めな位だ。

「ありがとう。

おかげで退屈な世界からでられた。」

人間。しかも、平民の使い魔をルイズは呼び寄せた。

「俺の名前は平賀才人。
宣しくな。」

才人と名乗る平民の紅い瞳がルイズを見据えていた。

使い魔は魔物で平民で狩人で。（後書き）

最強ハレム厨一病魔更新。
いつも通りですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9838x/>

ゼロの使い魔二次創作（予告？）使い魔は魔物で平民で狩人で。

2011年11月13日08時35分発行